

予後を考察する

～長期観察症例からの検証～

監修のことば

周知のとおり、「予後」とは「罹病した場合、その病気の辿る経過についての医学上の見通し（広辞苑）」のことである。日常の歯科治療では、患者が有する条件の多様性のために、予後を明確にすることができない場合がしばしばある。しかし、予知性の高い歯科医療を患者に提供するためには、長期間にわたって処置後の経過を追跡、検証し、そこから得られたエビデンスを別の治療にフィードバックしていくことがきわめて重要である。

長期が10年か20年か30年かについては、いろいろな考え方があると思うが、できるだけ長い年月にわたって健康な口腔が維持されるような「歯科医療の質」を保証することが、歯科医師に求められている。予後を考察することは、「歯科医療の質」を保証するための診断力・治療力・洞察力を涵養することにほかならない。若いうちから心がけて患者と向き合わなければ、多数の長期経過症例をもつことはできないだろう。

歯科疾患の特殊性を考慮すると、治療を成功させるためには正確な診断、安全かつ適切な治療計画が必須であるが、長期の経過観察は術者の診断・治療技術だけでは不十分であり、患者のセルフケアがなければ不可能である。歯内療法をきちんとできる歯科医師は、歯周治療も補綴治療も決して手抜きはしないだろう。口腔ケアをしっかりと指導して、患者と数十年間にわたって信頼関係を築くことができなければならない。そう考えると、歯科医師としての総合力がなければ、多数の長期経過症例を追跡できないのかもしれない。

本書には、斯界の権威というべき総合力をもった著名な臨床家が、インプラント、歯内療法、保存修復、審美歯科、歯周治療、義歯、顎関節症、矯正、小児歯科の症例のなかで、長期の経過を観察し、検証した内容のエッセンスが記載されている。言い換えれば、「歯科医療の質」を担保するためにおおいに役立つ考え方、アイデア、技術が紹介されている。とくに、若い歯科医師にとっては示唆に満ちた貴重な情報となるに違いない。

2009年3月

下野 正基

予後を考察する

～長期観察症例からの検証～

監修のことば

明治維新から今次戦争までと同じくらい戦後の時間が経ってしまった今日、歯科処置に求められている“良い予後”の概念も戦前とは大きく変わってきている。

戦前よりしばらく後までの長期経過観察症例報告に期待するのは、修復処置が崩壊するまでの時間と経過と原因の追求で、それを次の修復処置に反映させ、いかにより長い経過年数が得られるか、ということであった。それが、1965年頃より歯科処置に全面的に採り入れられだした鑄造修復技術をベースにした歯科処置と、さらにそのうえに最新の科学技術、材料が採用されるようになり、歯科処置は飛躍的に進歩した。その反面、科学技術の進歩に追いつくため、数年サイクルで新しい材料・器材が開発され、その科学的に正確な使いこなし方に忙殺されるようになってきてしまっていた。その結果、修復処置の術後経過は、科学的に正確に施術しなかった結果であるとされてしまいかねない状態になってしまっている。

ところで、本書に執筆されている先生方は、この材料・技術の変化に長年にわたり柔軟に対応しながら、その時々に応じた最新最良の歯科医療を現在も展開しておられる先生方である。その先生方が前に遡り現在の視点で、当時の診査・診断から処置、さらに長年にわたる術後経過を見直しておられ、その情報は文中に溢れている。おのおのの論文に共通していることは、前の時代には歯を中心に視て診査・診断を行って処置していたが、その後、科学の発達とともに口腔の中で機能する歯としての視点から見直しながら術後経過を評価し、さらには全身機能の中で口腔・咬合を視ている点である。

現在、一般科学の早い進歩とともに歯科医療にも次々とより優れた材料・器材が使用できるようになり、その使用技術を修得するのに追いまくられかねない状態になっている。しかし、視点を変えれば、何らかの原因で失われた生体の秩序やシステムのバランスを取り戻す手助けをしているのが、いま現在行っている医療であり、器材や方法はその手段にしかすぎない。

したがって、本書の各論文とも“はじめに”と“おわりに”を繋いで、あとは技術を求めて図を見るのではなく、文字を追いつつ文中に流れる執筆者の想いを汲み取ってから、その補助として図を見るようにしていただきたい。期待した以上の糧を得られる筈である。